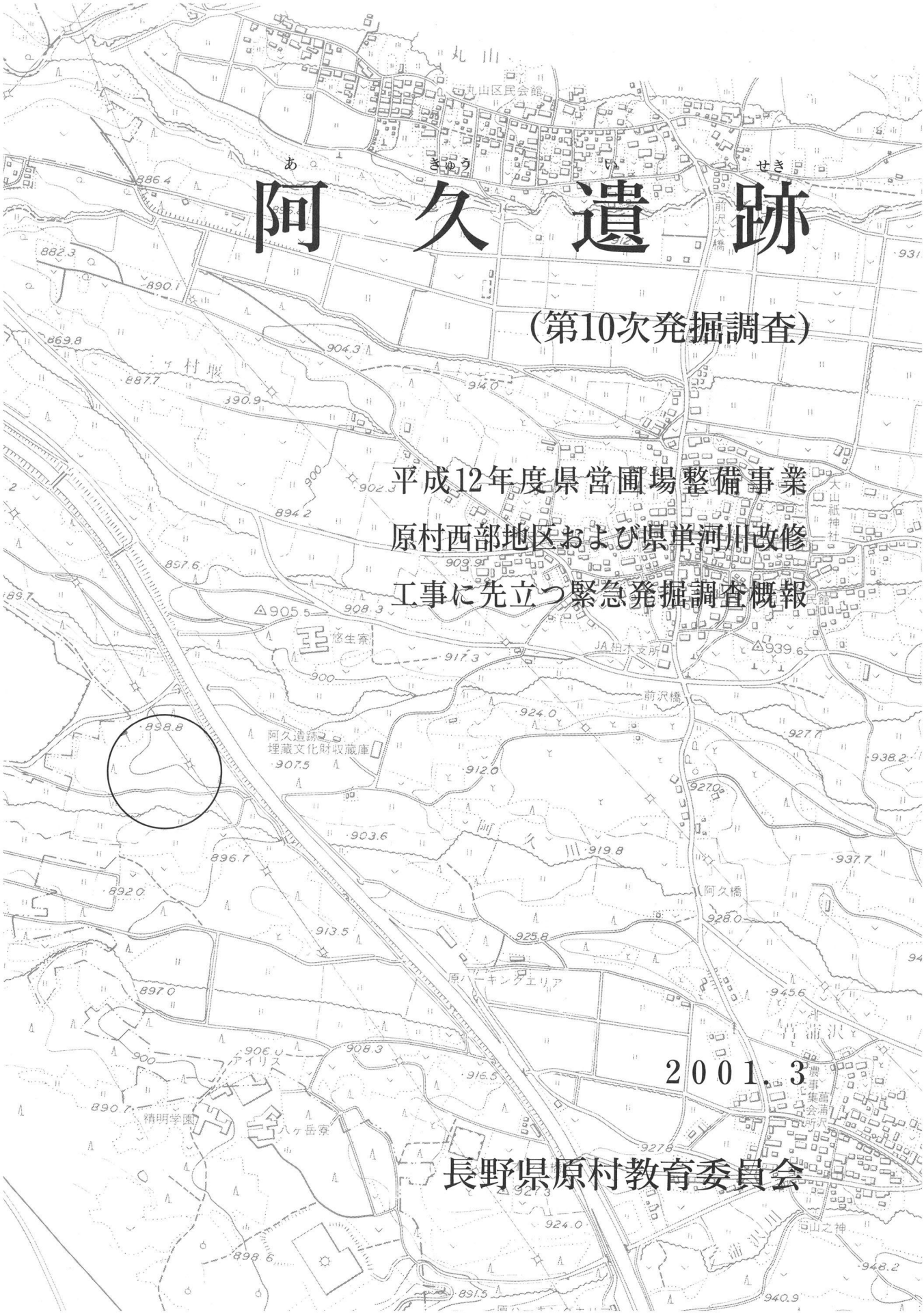


阿久遺跡（あくいせき）

（第10次発掘調査）

平成12年度県営圃場整備事業
原村西部地区および県単河川改修
工事に先立つ緊急発掘調査概報

2001.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1　○印が阿久遺跡

序

このたび平成12年度に発掘調査を実施した阿久遺跡の報告書を刊行することとなりました。

発掘調査は「県営圃場整備事業原村西部地区」と「県単河川改修工事」に先立って、諏訪地方事務所と諏訪建設事務所からの委託、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけて、村教育委員会が実施したものであります。

調査では溝跡を発見するに至り、当初は縄文時代の水場遺構の期待をもちましたが、泥炭層中から出土した杭を試料に、放射性炭素年代測定による検証で、中世に相当する年代をえることができました。縄文時代ではありませんでしたが、いずれにしろ貴重な遺構であり、破壊する範囲を最小限にとどめ、埋没保存を考えるなかで、県教育委員会をはじめ阿久遺跡整備委員会の戸沢充則・宮坂光昭・武藤雄六の諸先生、お名前を明記しませんでしたが多くの方々からご指導・ご助言をいただきました。また、諏訪地方事務所ならびに諏訪建設事務所をはじめとする関係機関の理解あるご配慮、発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申しあげます。

平成13年3月

原村教育委員会

教育長　大館　宏

例　　言

1　本報告は「平成12年度県営圃場整備事業原村西部地区」と「平成12年度県単河川改修工事」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する阿久遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、諏訪地方事務所と諏訪建設事務所からの委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、平成12年４月17日から10月11日にかけて実施した。整理作業は、平成13年１月17日から３月26日まで行なった。

3　現場の発掘作業における記録は、平出一治・津金喜美子・進藤郁代・小林りえが行い、遺構の測量は株式会社写真測図研究所に委託した。写真撮影は平出、空中写真は株式会社写真測図研究所に、放射性炭素年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

4　遺物の整理は、小林りえ・清水正進・横内かおり・五味さゆりが行い、図面の整理は小林が行った。出土した石器については株式会社アルカの角張淳一氏に実測・原稿を依頼した。

5　執筆は、平出が行った。

6　本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
　なお、本調査関係の資料には、11の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、会田　進・小林公明・小林正春・小松隆史・臼居直之・白沢勝彦・河西克造・戸沢充則・原　明芳・宮坂光昭・武藤雄六の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目　　次

序　　例　　言　　目　　次
Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 5
Ⅱ　発掘調査の経過（抄） …… 5
Ⅲ　遺跡の位置と環境 …… 6
Ⅳ　調査の方法 …… 6
Ⅴ　遺　　構 …… 8
Ⅵ　遺　　物 …… 12
Ⅶ　ま と め …… 13
引用参考文献　　調査組織　　報告書抄録

I　発掘調査に至る経過

阿久遺跡の保護については、① 県営圃場整備事業原村西部地区、② 県単河川改修工事、③ 村道改良工事　の３事業に係ることもあり、平成10年10月27日に行なわれた、①「県営圃整備事業原村西部地区にかかわる埋蔵文化財保護協議」、②「県単河川改修工事にかかわる埋蔵文化財保護協議」、③「村道改良工事にかかわる埋蔵文化財保護協議」で協議され、遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいことであるが、原村の農業の将来を考えると農地の整備は必要なことである上に、阿久川の改修工事も必要のことであり、村民からの強い要望もあり「記録保存やむなき」との考えに落ち着き、緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。出席者は、①は長野県教育委員会文化財保護課（平成11年４月より文化財・生涯学習課）、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の４者、②は県教育委員会文化財保護課、諏訪建設事務所建設課、原村役場建設課、原村教育委員会の４者、③は県教育委員会文化財保護課、原村役場建設課、原村教育委員会の３者であった。

緊急発掘調査は平成11年度（第９次）と12年度（第10次）の２か年におよび、11年度の対象地区は、① 県営圃整備事業原村西部地区、12年度は、① 県営圃場整備事業原村西部地区、② 県単河川改修工事、③ 村道改良工事　の３事業がその対象となった。

したがって、平成11年10月12日・25日に行なわれた保護協議では、前年度協議の確認を行ない。その後も調査日程等の打合せを行なうが、③村道改良事業に若干の問題を残したまま、発掘調査に着手した。しかし、進展はみられず阿久川の改修工事の日程等を考慮すると、調査期間の延長は考えられない状況であり、関係機関と協議を行なう中で、③村道改良工事に係る発掘調査は来年度以降に先送りせざるをえなくなり、平成12年度は、① 県営圃場整備事業原村西部地区、② 県単河川改修工事に係る緊急発掘調査　に切り替えている。

原村教育委員会は、経費については保護協議で調査対象面積による案分と決めたため、①県営圃場整備事業原村西部地区については、国庫および県費から発掘調査補助金の交付と、諏訪地方事務所からの委託をうけ、②県単河川改修工事については、諏訪建設事務所からの委託をうけ、平成12年４月17日から10月11日にわたって緊急発掘調査を実施した。

II　発掘調査の経過（抄）

平成12年４月17日　発掘準備をはじめる。

５月10日　平成11年度の試掘調査で石組遺構（調査の結果溝跡の一部）を確認した地点

の表土剝ぎを重機ではじめる。

15日　遺構の検出作業をはじめる。

17日　平成11年度の試掘調査で土器が出土した地点の表土剝ぎを重機ではじめる。

25日　重機でトレンチ掘りを行い、トレンチ内の精査をはじめる。

6月12日　暗渠排水（近世）の精査を行う。一時作業を中断する。

7月12日　重機による表土剝ぎ、遺構の検出作業を再度はじめる。

8月4日　溝跡の精査をはじめる。

9月20日　ラジコンヘリによる航空撮影および航空測量を行う。

28日　埋め戻しをはじめる。

10月11日　発掘調査を終了する。

III　遺跡の位置と環境

阿久遺跡（原村遺跡番号11）は、長野県諏訪郡原村柏木区の南西方約500mに位置している。八ケ岳から流下する阿久川と大早川によって、南と北を浸食された東西に細長い尾根上から緩やかな南斜面に立地している。南の阿久川側は比較的なだらかな傾斜であるのに対し、北の大早川側はきつい斜面となる。当地方においては大きな尾根で、昭和54年に中央自動車道の下を含めた55,940.97m²が国の史跡に指定されている。

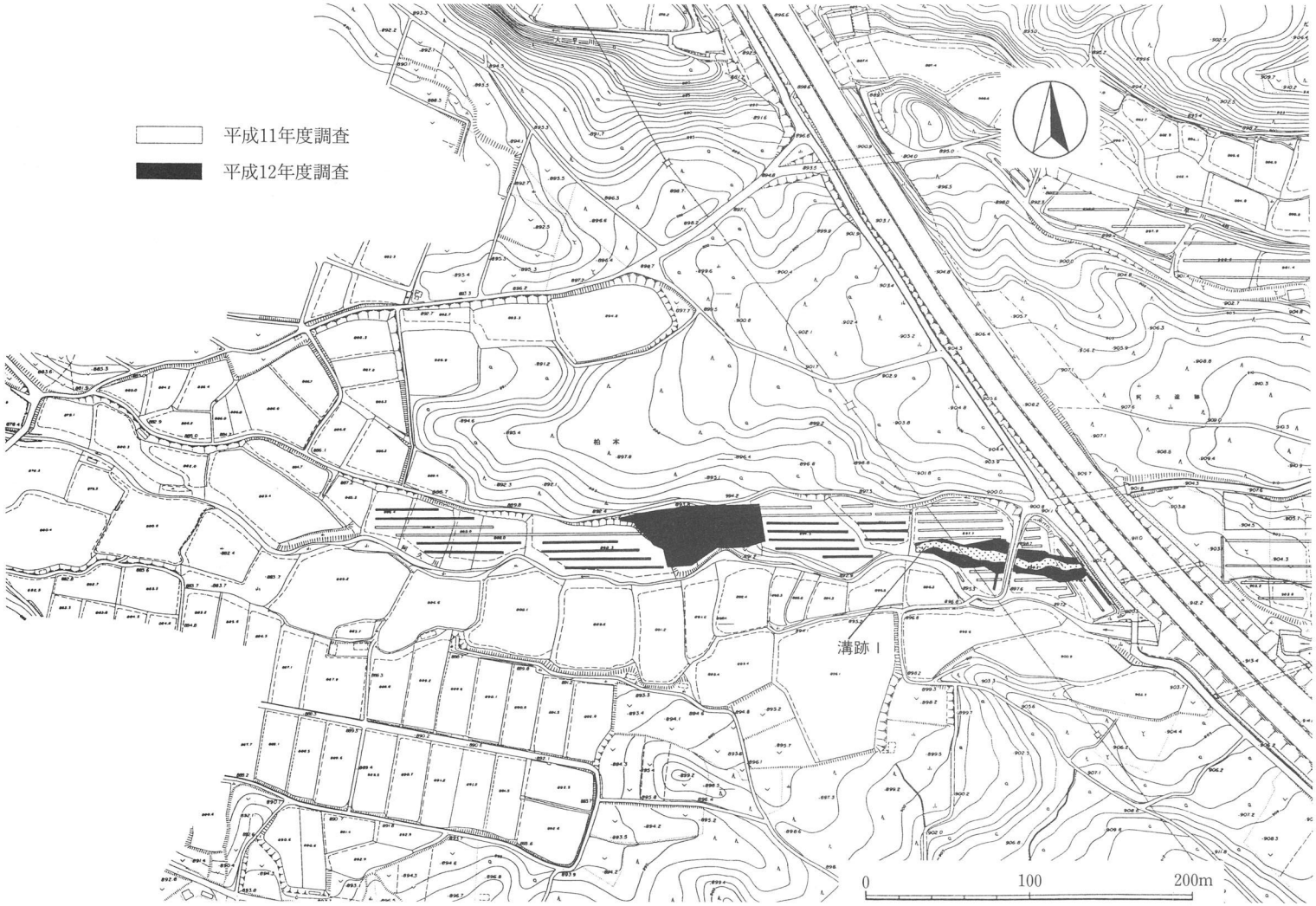
調査地点は、阿久川と国史跡にはさまれた範囲で、その地形から縄文の人たちが水場としていたことが容易に考えられる状況で、少なからず水場遺構の発見を期待していた。地目は水田と普通畑で、水田造成による切り盛りは著しい。標高は886～900mを測る。

八ケ岳西南麓一帯には東西に細長く発達した大小様々な尾根があり、それらの尾根上には縄文時代を中心とした遺跡が埋蔵されている。阿久遺跡の周辺にも大小様々な遺跡がみられる。その密度は極めて高い地域である。

IV　調 査 の 方 法

発掘調査の対象は、平成12年度県営圃場整備事業原村西部地区と平成12年度県単河川改修工事にかかる遺跡の全域におよんでいる。

第2図に示したように、平成11年度に実施した試掘調査で石組遺構（調査の結果溝跡の一部）を確認した地点は、重機で表土剝ぎを行い遺構の検出作業を進めた。平成12年度も重機によるト



第１図　阿久遺跡第10次発掘調査区域図（1：4,000）

レンチ発掘、トレンチ内の精査を行い、遺物および遺構の有無を確認した。遺物が出土した地点を中心に重機による表土剝ぎ、引き続き遺構の検出作業を進めた。

発掘調査は原則として、ローム層の上面ないしは地山の自然礫まで層位別に行い、遺物は層位別・遺構別に取り上げた。ちなみに調査面積は4,404m²である。

溝跡１基を発見しているが、その全景を把握するまでに、先ずは水田造成による攪乱に惑わされ、次は阿久川のたび重なる氾濫による河川礫に惑わされた。そんなこともあり溝跡を破壊するトレンチを掘っているし、無駄な時間も費やしたようである。溝跡を切るトレンチの断面観察では、土器破片と黒曜石もみられ、人為的に構築されたＶ字溝であることがわかり、その重要性は極めて高いものと思われた。しかし、調査期間が限られている上に、調査体制がととのわないこともあり、関係機関と協議を進める中で、基本的には保存を前提に調査を進め、破壊個所は最小限にとどめた。

破壊される範囲については精査を実施し、保存が可能な範囲は部分調査を行い、溝跡の性格の把握につとめた。

泥炭層の調査では、多くの人たちにご指導をいただいたが、不手際が多く今は反省する事の方が多い。

Ｖ　遺　　構

図示しなかったが中世の溝跡を発見調査した。ここでは写真に若干の説明を加えてみたい。

写真１
西上空から

写真２
西から

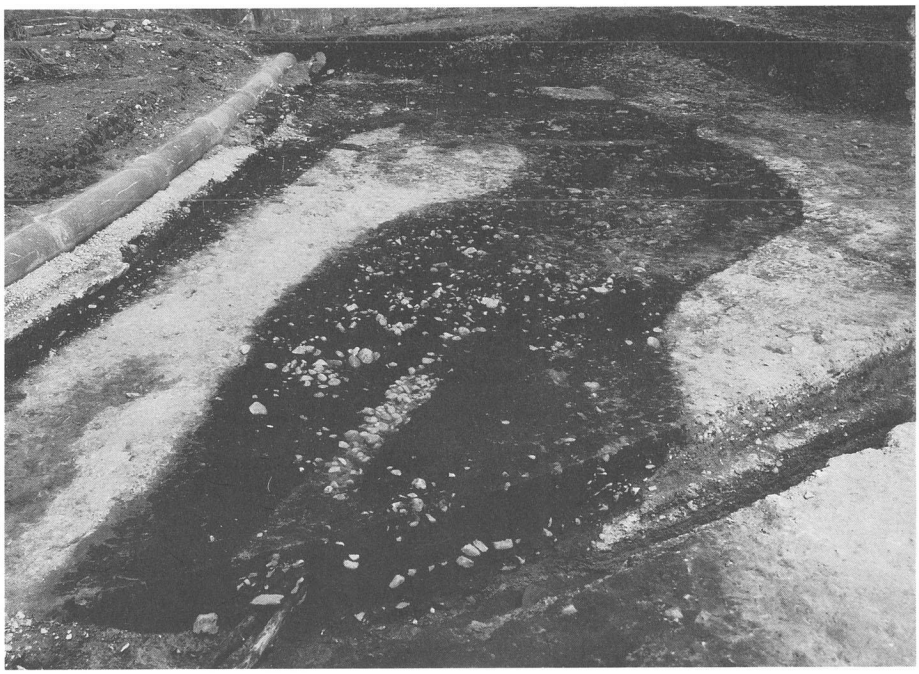


写真３
西上空から

写真１は全景、写真２～４は阿久川の改修工事で破壊された個所である。溝跡は曲がりくねっているが、写真１でみるように阿久川と同じ方向に流れていることがわかる。上流は中央自動車道の下となり、溝跡のはじまりを確認することはできなかった。もし自然の流れであるなら、南傾斜にあるため、傾斜の方向である阿久川に直交する流れになっていたように思う。

写真２は検出状況である。阿久川の氾濫による礫をかぶっていることがわかるし、新しい暗渠排水が２個所でみられた。

写真３と４は調査後であるが、軟質の岩をＶの字状に掘り込んでいた。暗渠排水で壊された個所もみられたが、壁の傾きはほぼ同様で整然としていた。また、溝内に残る大きな礫を取り除こうとした痕跡が認められた。

写真４　西から

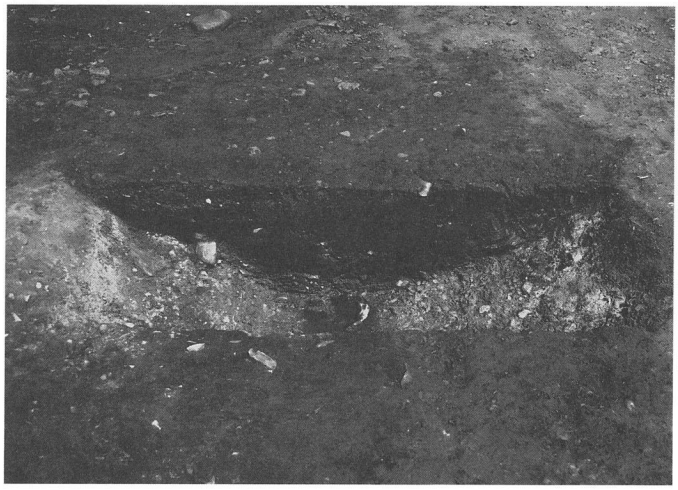
写真５　上空から

写真５は、阿久川の氾濫によって押し出された礫が、溝跡を覆っていたこともあり、単独の石組状の遺構と思い、重機でトレンチ掘りを行い、平板状の礫数個を取り除くという不手際をしてしまった。したがって完全な姿ではないが、礫は水を塞き止めるための施設であり、ここだけが広くなっていた。目的は不明であるが、水溜りを使用する作業の場であったものと思われる。

写真6
西から

破壊される範囲を最小限にとどめ、埋め戻すことになったため、溝に直交するトレンチを掘り、埋土の状況および掘り込みの状態を観察した。いずれもＶの字状に掘り込まれていた。

写真7
西から



軟質の岩をＶの字状に掘り込んでいることがわかる。岩の間から水のしみだしが所々でみられた。泥炭層が発達していたが、極めて粒の小さい砂が、何層にも重なっていた。礫の流れ込みが少ない。

写真8
上から

出土した植物遺体は、指の太さ位の丸太の木材が多く、鋭利な刃物による切り口が見られるだけで、明確な加工痕が認めらる製品は少なかった。その多くは壁の保護に使われていたのかもしれない。

VI 遺　　物

図示しなかったが僅かな縄文時代の土器破片と石器、平安時代の土師器・須恵器の破片、近世の古銭が僅かに出土している。溝跡の時期を決める資料はない。

溝跡の泥炭層中からは木製品（杭）、昆虫化石、植物遺体が出土している。ここでは、溝跡の帰属時期を決めた杭の分析結果を記載しておきたい。

阿久遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

は　じ　め　に

阿久遺跡は、八ヶ岳西麓に放射状に拡がる河岸段丘の末端近くに位置している。今回の発掘調査では、縄文時代および平安時代の遺物が検出されている。調査区内の低地部においては溝址が検出されているが、周囲には縄文時代と古代の包含層が確認されているが、溝に伴う遺物等は乏しく、構築年代が不明である。今回の自然科学分析調査では、この溝より検出された杭材を用いて放射性炭素年代測定を行い、溝の構築年代について検証する。

1．試　　料

今回対象とする溝の覆土は2層に分けられ、下層は礫および砂の層、上位層は泥炭層となっている。下位の砂礫層中からは黒曜石、上位の泥炭層中からは平安時代の土師器片などが出土しているが、溝の構築年代を確定できるような遺物は検出されていない。今回放射性炭素年代測定を行う試料は、溝内から出土した杭材である。杭材は打ち込まれた状態ではなく、泥炭層中に横転した状態で検出されている。

2．分　析　方　法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

3．結　　果

測定結果を表1に示す。表示した年代は1950年から何年前かを示す年数で、同位体効果による測定誤差を補正した年代値である。^{14}C の半減期として LIBBY の半減期5570年を使用した。誤

差は標準偏差1σに相当する年代である。$\delta^{13}C$の値は、試料炭素の$^{13}C/^{12}C$原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて算出した値である。

測定された年代は、中世に相当する年代値である。

表1　放射性炭素年代測定結果

採集層位	試料	年代	Code No.
溝址内泥炭層	木片（杭材）	460±70 $\delta^{13}C=-26.9$	Gak-20618

4．考　　察

測定された年代は、杭材が立木より切り取られた年代に相当するものである。したがって測定に用いた杭材が溝構築時に用いられたものであるとすれば、溝の構築年代を示唆する可能性がある。この場合、溝の構築は中世に行われたと考えられる。しかし、杭材は溝覆土の上位層である泥炭層中から横転した状態で検出されているため、溝の構築に関わるものではなく、溝構築後の混入物である可能性もある。この場合、溝の構築は約460年前より以前、すなわち中世以前と考えることもできる。

Ⅶ　ま　と　め

阿久遺跡の調査であることから縄文時代前期の遺構を期待したが、僅かな土器破片と石器を発見しただけである。水田造成によってローム層が削平された範囲は広く、また、数回におよぶ阿久川の氾濫も観察できたことから、阿久川の利用は容易に考えられることであるが、居住の場としては適していなかったようである。

土器破片と石器の発見数は少なかったが、ここは縄文時代前期における阿久遺跡の範囲内であり、遺跡外縁部のあり方の一端を窺うことができたといえよう。

中世の溝跡は、人為的に造られた曲がりくねったV字溝であり、泥炭層が形成されていたことからみて、水の流れはゆるやかであったものと思われる。また、埋土中には数回におよぶ礫の流れ込みが観察できたし、氾濫による礫で覆われた状態であったことから確実に阿久川とは別の遺構であるが、その性格を明らかにすることはできないままである。

溝を構築した年代の指標となる土器の発見はなかったが、幸いに泥炭層中から杭をはじめ加工痕のみとめられる木製品・植物遺体・昆虫化石などが発見されている。加工痕が明確に認められた杭材を用いて、放射性炭素年代測定を行ったところ、460±70という中世に相当する年代値をえることができた。これは原村の開村以前に構築されたことになるが、村内にこの溝についての言い伝えは残されていない。いずれにしろ村の歴史を物語る貴重な発見であり、その性格の究明

をはじめ、植物遺体の分析等による環境復元など多くの研究課題を残しているが、関係機関の理解ある協力によって、工事で破壊される範囲を最小限にとどめ、その多くを埋めもどし後世へ伝えることができた。

引用参考文献

1985 07　原村役場『原村誌　上巻』

1982 03　長野県教育委員会『昭和51・52・53年度　長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　原村その５』

1999 03　原村教育委員会『原村の埋蔵文化財49　前沢・臼ヶ原・臼ヶ原西・臼ヶ原南遺跡　平成10年度県営圃場整備事業原村西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書』

調　査　組　織

事　務　局　　原村教育委員会

教　育　長	大舘　宏	
学校教育課長	小林　銹晃	
文化財係長	平出　一治	
文化財係	中村　恵子	

調　査　団

団　長	大舘　宏（原村教育委員会教育長）			
調査担当者	平出　一治（文化財係長）			
調査参加者	発掘作業	吉川　幸子	久根　種則	小池　英男
		小島久美子	小島　政雄	小林　りえ
		小松　弘	五味さゆり	五味八代江
		清水　太助	清水　正進	進藤　郁代
		田中　初一	津金喜美子	西沢　寛人
		日達今朝江	横内かおり	
	整理作業	小林　りえ	五味さゆり	清水　正進
		横内かおり		

報告書抄録

ふりがな	あきゅういせき
書名	阿久遺跡（第10次発掘調査）
副書名	平成12年度県営圃場整備事業原村西部地区および県単河川改修工事に先立つ緊急発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	原村の埋蔵文化財
シリーズ番号	57
編著者名	平出　一治
編集機関	原村教育委員会
所在地	〒391-0192　長野県諏訪郡原村12080　　TEL 0266-79-7930
発行年月日	西暦　2001年03月

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m²	調査原因
阿久（あきゅう）	長野県諏訪郡（ながのけんすわぐん） 原村柏木（はらむらかしわぎ）	203637	11	35度 57分 37秒	138度 11分 28秒	20000417 ～ 20001011	4,404	平成12年度県営圃場整備事業原村西部地区および県単河川改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
阿久	集落跡	縄文時代 平安時代 中世	溝跡	前期土器破片、石器、土師器・灰釉陶器破片、木製品、植物遺体、昆虫化石	溝跡の一部は埋め戻し保存した。

原村の埋蔵文化財57

阿　久　遺　跡　（第10次発掘調査）

平成12年度県営圃場整備事業
原村西部地区および県単河川改修
工事に先立つ緊急発掘調査概報

発行日　平成13年3月

発　行　原村教育委員会
〒391-0192 長野県諏訪郡原村
TEL 0266-79-7930

印　刷　もえぎ企画書籍
〒394-0043 岡谷市御倉町2-21
TEL 0266-22-4892